

頭韻を踏む言語 バントゥー語の名詞クラス

名詞とそれを修飾する形容詞の語尾が同じになる言語は少なくありません。ロマンス語、スラブ語など、性があり性によって語尾の音が変わる言語ならそうです。

スペイン語：una linda niña pequeña (a cute small girl) un chico alto y gordo (a tall fat boy)

クロアチア語：slatka mala djevojčica (a cute small girl) debeli visoki dječak (a tall fat boy)

ギリシア語：μια χαριτωμένη μικρή ηλικιωμένη (a cute small oldwoman)

έννας ψηλός χοντρός κύριος (a tall fat gentleman)

ヒンディー語：ek pyārī choṭī laṛkī (a cute small girl) ek barā lambā laṛkā (a big tall boy)

アラビア語：fatāt ṣaghīrat laṭīfat (a cute small girl) rajul ṭawīl jamīl (a tall handsome man)

また主語と動詞の語尾が韻を踏む言葉もあります。性があり性によって語尾の音が変わる言語で、分詞が述語に用いられる場合です。

イタリア語：il tempo è passato (the time has passed)

ブルガリア語：zhena-ta pristigna (the woman arrived) -taは後置定冠詞

ヒンディー語：laṛkī ā gaī (the girl arrived) laṛkā ā gayā (the boy arrived)

ところが、名詞と形容詞などの修飾語、主語と述語がどちらも呼応し同じ音で始まる言葉があります。ケニア-コンゴ以南の南部アフリカで話されている、スワヒリ語などのバントゥー諸語です。スワヒリ語の例を見てください。見事に頭韻が連なっています。

Kitabu kimoja kimefunguliwa (一冊の本が開いてある)

Vitabu viwili vimefunguliwa (二冊の本が開いてある)

Mtoto mmoja anasoma kitabu chake cha kiada (一人の子供が自分の教科書を読む)

Watoto watatu wanasoma kitabu chao cha kiada (三人の子供が自分の教科書を読む)

ch- は ki- の音便形です。cha は所有表現 -a の呼応形で、いわば前置詞 of の働きをします。

バントゥー語の名詞は、単数と複数を別々に数えて合計23のクラスに分けられ、スワヒリ語には15の名詞クラスがあります。それぞれ独自の接頭辞で始まり、典型的な場合は意味で分けられますが、その接頭辞で始まらない単語や、典型的な意味に当てはまらない単語も沢山あります。便宜上単複をまとめて例を示してみましよう。

1.m – 2.wa 人： mtu-watu人、mtoto-watoto子供、mwanafunzi-wanafunzi生徒；bwana-mabwana旦那

3.m – 4.mi 木： mti-miti木；mkono-mikono手；mlima-milima山、moto-mioto火；mwaka-miwaka年

5.ji/Ø – 6.ma 果物： tunda-matunda果物；duka-maduka店；jua-majua太陽；jicho-macho目、jino-meno歯

7.ki – 8.vi 道具： kitu-vitu物、kiti-viti椅子、chumba-vyumba部屋；kichwa-vichwa頭；kilima-vilima丘

9.N/Ø - 10.N/Ø 動物： mbua-mbua動物、n'gombe-n'gombe牛；nchi-nchi国、nguo-nguo衣服、mvua-mvua雨

11.u – 10.N/Ø 長物： ubao-mbao板、ulimi-ndimi舌、uso-nyuso顔、wimbo-nyimbo歌；usiku-siku夜

14.u 抽象名詞： uzuri美、uhodari才能；ugonjwa-magonjiwa病気

15.ku 不定詞： kupenda愛すること、kusoma読むこと

16.pa 特定場所 17.ku 不特定場所 18.mu 場所内部： mahali場所

m-など同じ標識のものや無標識の単語も、文中では修飾語の標識から数やクラスを識別することができます。つまり、あるクラスの名詞はそれを修飾する形容詞やそれを受ける動詞が同じクラスの形をとり、前置詞もそれに係る名詞と同じクラスの形をとることになっており、従って同じ頭音が続くことがあるわけです。

他の例としてコンゴ(ザイール)の共通語の一つであるリンガラ語の例を挙げておきます。

1.moto– 2.bato 人 : 3.motó– 4.mitó 頭 : 5.likambo– 6.makambo 物 : 7.esengo– 8.bisengo 喜び :
9.ntaba– 10.ntaba 山羊 : 9.nzambe– 2.banzambe 神 : 11.loboko– 6.maboko 手 : 14.bonene 大きさ : 15.kosala
働くこと

Bana misato batáangi buku na bango ya kelasí (三人の子供が自分の教科書を読む) batáangi 読む、bango 彼らの
Ndako ya Nzambe ezali wapi? (教会はどこですか) ndako 家、nzambe 神、ezali ある、wapi どこ

名詞クラス自体は、ヨーロッパ諸語にみられる男性・女性・中性などの性の拡大概念と捉えることができ、スワヒリ語などのバントゥー語以外にも広い意味で同系とされるニジェール・コンゴ語族のフラニ語、ウォロフ語やザンデ語、北東コーカサス語族などに見られるそうです。ただし、ウォロフ語では名詞自体ではなく後置の定冠詞がクラス分けされ、ザンデ語では代名詞に男性・女性・動物と子供・その他の4種の別があります。

スワヒリ語のもう一つの特徴として、その動詞が主語・時制・目的語を示す標識が動詞語幹の前に付き、分かち書きせず一語として動詞複合体を形成します(関係節中の動詞にはさらに目的語標識の前に先行詞を示す標識が付きます)。動詞語幹自体にも受動・使役などを表す接尾辞が付きます。

Nilikinunua kitabu. (私は本を買った) nilikinunuaにおいて ni 私、li は過去を表す標識、ki は kitabu を受ける目的語標識、nunua は動詞語幹です。

Mama anampikia mtoto wake chakula. (ママは子供のために料理する) anampikia において、a は mama を受ける主語標識、na は現在を表す標識、m は mtoto を受ける目的語標識、pikia は pika(料理する)の派生語で受益者を目的語にする接尾辞適用形 i が付いたものです。mtoto 子供、wake 彼女の、chakula 食べ物。

動詞句の構成が、アイヌ語などの抱合語と似ていますね。ただし、抱合語では目的語である名詞が動詞複合体中に入ることもできるそうです。

Keraan pe somo an=eci=ere na. (美味しいものを上げないよ) pe もの、an 私、eci お前達、ere 食べさせる、somo は否定語。

スワヒリ語はアフリカ東海岸のバントゥー語とアラブ商人のアラビア語が交流することで生まれたものです。混淆の過程でバントゥー語にあった高低アクセントは失われました。スワヒリという言葉自体がアラビア語の海岸 sāhil の複数形 sawāhil からとったもので、かつてはアザニアやザンジと呼ばれていました。紀元前からインド洋は貿易が盛んでしたが、イスラムの発展に伴って7世紀末には当地にもムスリム商人が進出していきました。10世紀後半にペルシア人王族が渡来して建国したというタンザニアのキルワ島の繁栄ぶりがイブン・バトゥータによって伝えられています。1698年にはアラビア半島東南部のオマーンのスルタンが、二世紀間勢力をふるっていたポルトガルの艦隊を破ってザンジバル島を占領し、1832年には本拠をここに移して、イギリスの保護国となった後も第二次大戦後の独立直後までスルタン国として存続していました。文字もかつてはアラビア文字で、17世紀以降の文書が残っているそうです。第二次大戦後にケニアとタンザニアで国語に指定され、21世紀になってウガンダで、次いでルアンダでも公用語に指定されましたが、太湖地帯の他の諸国やコンゴ(ザイール)東部でも共通語として普及しています。

世界の主な言語のうちで、性または名詞クラスが5種類以上ある言語が一割弱あり、2~4種類ある言語は約三分の一で、主に印欧語族、アジア・アフリカ（セム・ハム）語族、ドラヴィダ語族の言語です。なお、名詞クラスや性を持つ言語は必ず文法上の数を持つとされています。フィン語などのウラル語族、トルコ語などのアルタイ諸語、朝鮮語、日本語、中国語や東南アジアの諸語には性はありません。現代日本語では、人称代名詞のみ性の区別をし、中国語では書面上でのみ三人称で他 he、她 she、它 itを区別し、さらに動物を指す“牠”や神を指す“祂”や、二人称の女性形“妳”もあるそうです。

印欧語は本来、男女中性の三種の性を持っていたと考えられています。ラテン語の後裔であるロマンス諸語はほとんどが中性を失っていますが、ルーマニア語には残っています。ギリシア語や大部分のスラブ諸語は三種の性を保っていますが、バルト諸語は男女二種しかありません。ゲルマン諸語では、アイスランド語とドイツ語で三種保存していますが、スウェーデン語などは男性と女性が合体して通性/共性となり中性との二種になっており、オランダのオランダ語も同様の傾向だそうです。アルバニア語は三種揃っていることになっていますが、中性の使用は稀だとのこと。ケルト諸語には二種あります。ペルシア語やアルメニア語では性の区別が完全になくなり、英語では人称代名詞の三人称単数だけに性別が残り、逆にヒンディー語やパンジャブ語では名詞の性別は二種残っているのに人称代名詞で性の区別がなくなっています。他のインド・アーリア語では、マラータ語で三種残っており、ベンガル語では名詞も代名詞も性別がなくなっています。

アラビア語などのセム語は男女の二種です。同じアジア・アフリカ語族のハウサ語やソマリ語も同様です。なお、アラビア語では、非人間の複数形は女性とみなされ、修飾する形容詞やそれを主語とする動詞も女性形を取ります。-a (-at) で終わる名詞は女性で、形容詞の女性形も同じです。

kalbun kabīr (a big dog) qittatun kabīra (a big cat) kilābun kabīra (big dogs)

ソマリ語では性は後置の定冠詞によってのみ区別され、また複数になると性転換するそうです。また、アラビア語やハウサ語では代名詞で三人称だけでなく二人称も男性女性の区別があります。

ドラヴィダ語族のタミル語では、神と人が男性と女性、それ以外が中性と完全に意味に対応しています。

ウェールズ語では、性による語形変化はほとんど失われていますが、定冠詞 y を伴うとき女性単数名詞だけ名詞およびそれを修飾する形容詞の語頭子音の軟音化を起し、また女性単数名詞の後の形容詞が軟音化するという現象によって性別が表に出てきます。

y + merch (girl) → y ferch merch + pert (pretty) → merch bert

性は名詞の語尾と大まかに対応することが多く、特定の語尾が特定の性と決まっているものもありますが、例外も沢山あります。性の効果としては、先行詞など修飾関係の明確化が大きいと思います。

助数詞・類別詞

日本語の助数詞は、名詞を種類や形状によって分類し範疇化する点で名詞クラスに似ています。日本語の助数詞は古代中国語に由来するとされていますが、ヒトリ、ミツなど固有数詞を使う場合は固有語の助数詞を、また一個、三人など漢数詞を用いる場合は漢語助数詞を使うのが原則のようです。（ただし羽ワは漢数詞と組み合わせ、また4年、7人など一部固有数詞を使うものがあります。）日本語では“三人の友達が”の他に“友達が三人”という言い方があり、こちらの方が普通は自然と思われませんが、名詞の後の助詞はガとヲに限られ、他の助詞の場合は“友達三人に”などの形になります。この三者を前置型、遊離型（副詞的用法）および後置型と呼ぶことにします。前置型が定・全体、後置型が不定・部分など意味の違いをもつ傾向があるようです。以下、語順が一目でわかりやすいように指示詞+数詞+助数詞(類別詞)+形容詞+名詞を[此三匹の黒猫]と表示することにします。

なお、日本語では、ヒト、フタ、ミなどの数に、人数ならリ、個数ならツ、日数ならカ、年齢ならチやヂ（ツの別音と言われています）を付けますが、古くは一般の名詞には千歳、八千代、八重、単位では八束、八尋など数の後に名詞を直接つないでいました。

朝鮮語にも助数詞があります。日本語と違って、自明の場合には **han ai**（1人の子供）などのようにしばしば助数詞が省略されます。固有語と漢語の使い分けがある点で日本語と似ていますが、個、名や時など漢語助数詞にも固有数詞を使う例がかなり多く、漢数詞は時間などの単位が主なようです。人を数えるには漢語で1人 **ilin**、固有語で **han-myeon** や **han-saram**、年齢を言うには漢語で二歳 **i-se**、固有語で **du-sal** と言います。番は固有数詞が付くと回数、漢数詞が付くと順番の意味になるそうです。（なお、韓国語では99まで固有数詞で言う数え方が今でも使われています。）また、日本語と同様に“一人の男”（前置型）と“男が一人”（遊離型）、“男一人が”（後置型）の三種の使い方があり、前者の場合は助数詞の後に“の”に対応する **ui** が付きます。さらに“魚を十匹”や“魚十匹を”の他に“魚を十匹を”も可能だそうです。また遊離型では助詞の制限もあります。[此三匹の黒猫]

マレー語（インドネシア語とマレイシア語およびその元になったスマトラのムラユ語）では、人 **orang**、動物 **ekor**、物 **buah** などの助数詞を使っています [三匹猫黒]。マレー語でも遊離型/後置型（助詞がないので区別できません）があります。日本語で言えば [猫を三匹] という言い方です。

Dia menulis surat kepada pacarnya sebanyak tiga lembar.（彼は多くても3通の手紙を彼女に対して書きました）

Tolong petik daun teh itu sebanyak lima pucuk.（そのお茶の葉っぱを多くとも5枚摘み取ってください）

Jangan tebang pohon itu satu batang pun!（一本たりともその木を伐採するな!）

Obat ini harus diminum setiap hari tiga kali masing masing dua butir.（この薬は毎日3回それぞれ2粒飲まなければならない）

前置型では数字に、後置型では名詞に焦点があります。後置型が可能なのは名詞が主格と目的格の場合だけで、前置詞の後では [三匹猫] しか許されないのは、日本語や朝鮮語と同じです。

中国語の量詞は、人にも個（個）を用いるなど日本語の助数詞とは用法がまったく違っており、例えば、長いものには「一支鉛筆」など“支”を使い、“本”は「一本雑誌」など書物・書類に使います。もちろん、人に対する名、大型動物に対する頭、車両に対する輛など共通するものいくつかあります。日本語と同様に一双鞋（一足の靴）、一套茶具（一揃いの茶器）など、対や組を数えるための集合量詞もあります。また、名詞に用いる名量詞に対して、“回”や“次”のように動詞を修飾するものを動量詞と呼んでいます。指示代名詞の“這” **this** や“那” **that** は量詞の前に付き、形容詞は量詞の後に来ます [此三匹黒猫]。単数の場合は一を省略して這個～、那本～などと言います。言い換えれば名詞に指示詞が付くときは量詞を添えなければなりません [此

匹猫]。そして再出の場合は名詞なしで“這個”などと代名詞的に用いられます [此匹]。この二点で量詞は助数詞と違っており、類別詞 classifier と呼ぶのが妥当だと思います。なお、“幾つか”のような不定数は“一些”、“有些”や“一点儿”で表されますが、量詞なしで名詞に前置され、また“這些” these、“那些” those が量詞なしで指示代名詞の複数として使われます。疑問詞の“哪” which も指示詞と同様に使われます。秦より前の古代中国では馬千乗など量詞が数詞の後に置かれていたようで、量詞が多用されるようになったのも紀元後とのことです。遊離型はありません。

ベトナム語も類別詞を多用する言語です。特定のものを指すときに数詞なしで使われ、一般的にいう場合は類別詞を付けないので、定冠詞に似た働きも持っています。この特定性がベトナム語類別詞の特徴と言えます。もちろん数詞を頭につけて助数詞として使うこともできます。人の người、動物の con、物一般の cái や chiếc が代表的なものです。漢語起源のものも含み、全部で200種類以上あるそうです。ベトナム語にはもちろん漢数詞も入っていますが、助数詞と組み合わせでは使われず、使用が慣用句に限られるようです。những (複数の) や một số (いくらかの) など数量を表す言葉 (量語) も数詞の代わりに使うことができ、したがって中国語と違って類別詞を伴います。また、指示詞や形容詞と一緒に使うこともできますが、ただしベトナム語では指示詞は形容詞と同様に名詞の後に来ます。つまり、[匹猫、三匹猫、匹猫黒此、三匹猫黒此] の四種の配置があるわけです。名詞が既知である場合は中国語と同様に省略可能です [匹黒]。なお、ngón (指) や thành phố (市) など類別詞を挟まずに数詞に直接後置できる名詞もあり、さらに tư tưởng (思想) や sinh viên (学生) などは類別詞を挟むことも類別詞なしで直接後置することもできるそうです。

タイ語でも類別詞が使われており、人に対する k'hon、動物の tua、物の an、塊の l'aukなどが代表的なものです。上記の言語とは違って語順は名詞が先に来て、本1冊と同じ順序になります [猫三匹]。(ただし話し言葉では一の時だけ an n'ung (一個) などと類別詞を数詞の前に置くこともあるそうです [猫匹一])。“靴2足”は r'ongtháo s'ong kh'uu で、s'ongが2 (<双)、kh'uuが“対”の意味ですが、“この靴”は r'ongtháo kh'uu ní ([猫匹此]、“赤いの”は kh'uu s'ii d'eej [匹黒] となります。つまり名詞が前置する以外はベトナム語と同じですね。数詞の位置に“すべての”など数量を表す言葉が入り得ることも同じです。特定する働きもあります。ただし、数詞と形容詞を併用する場合は rót k'han mài s'iam k'han ní (この3台の新しい車) と類別詞を繰り返して [猫匹黒三匹此] の順序になります。(なお、タイ語の数詞は3以降が s'iam、s'ii、h'aa、h'ok、c'et、p'æ̀æt、k'aa、s'ipと古典漢語によく似ており、余りにも酷似していることから、同系ではなく、紀元前にタイ族の祖先の越人が浙江から福建、広東に至る華南地方に住んでいた頃に借用したものとされています。) 同系のラオス語も同じです。遊離型も可能です。同系語にはベトナム東北部中越国境付近に住むヌン語のように[三匹猫黒此]と言う言葉もあるそうです。

ビルマ語は [此猫黒三匹] 型で、人 yauk、もの khu など常用のものでの十個以上の類別詞があると言います。遊離型はありません。同じチベット・ビルマ語派のカチン語では、人に marai、動物に hkum などがありますが、種類は少なく使用は任意だそうです。

クメール語は [猫三匹黒此] 型で人には n'æk を使います。[猫三]、[猫此]、[黒猫三]、[黒猫此]、[黒猫+teang+三此]などの型が可能ですが、人以外は必須ではなく省略されることも頻繁です。遊離型も可能です。

ベンガル語には、一般 ta、人 jon があり [三匹猫]、名詞が主格以外の時などは省略が普通で [三猫]、名詞の省略も可能 [三匹] だそうです。ネパール語も、人 janā、物 watā があり、ベンガルと類似していると言います。

助数詞・類別詞の使用は東アジア・東南アジアが中心で、南アジアや西アジアでも部分的に使われることがあります。系統的ではありません。タミル語では人 per のみ、ペルシア語には人 nafar、物 tā、dāne、トル

コ語に物 *tane*、ウズベク語にも *dona* 個、*bosh* 頭、*bog'* 束があります。ハンガリー語にも助数詞 *darab* 個、*fej* 頭、*szál* 本、*szelet* 枚があるそうです。

この他、アメリカの諸言語にも助数詞をもつものがあり、またカナダ西海岸のツィムシアン語には、助数詞と同じ働きをする7種の接尾辞があるとのこと。

英語などで不可算名詞の量を表す表現 *a sheet of paper* や *un verre de vin* は助数詞と似ており、容器を用いる場合も含めて単位を表す名詞は一般に類別詞と似た挙動を示すのはご存じの通りです。

中国と東南アジアの単音節声調言語で類別詞の使用が盛んなのは、類別詞が単音節の単語の意味分別に役立つこともその大きな理由と考えられます。

類別詞と文法上の性・数は対照的な概念であり、相補分布すると言われています。名詞の種類を単語自体の形で表すのが性・名詞クラスなら、別の言葉で表すのが類別詞です。漢字の偏旁やヒエログリフなどの限定符も似た役割ですね。この別は、叙述形容詞が *be* 動詞を必要としない形容詞用言型と、形容詞が名詞と同様の変化をする形容詞体言型の別とも対応していると言われています。